

第10回：日露戦争

(<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>)

はじめに 日露戦争とは

I, 日露の対立～ロシアは危険な隣人だったのか

1, 司馬遼太郎の「ロシア像」

日本は、その歴史的段階として朝鮮を固執しなければならない。もしこれをすてれば、朝鮮どころか日本そのものもロシアに併呑されてしまうおそれがある。

2, 現代歴史学のロシア像

①和田春樹『日露戦争 起源と開戦』（2009）

「ロシアは奇襲攻撃を受け、抗議の宣戦布告を出すなど完全に受け身であった。」「戦争をすることをロシアが望んでいなかった。」「ロシアの態度は最初から消極的だった。」

②伊藤之雄『山県有朋』（2009）

皇帝ニコライ二世は日本との戦争を望んではおらず、日本の韓国における、ロシアの満州における利益を相互に承認しても良い、という満韓交換の立場に立っていた。

3, なぜ「危険なロシア」像が生まれたのか？

- ①ロシアの宿敵イギリスの目で見えていた日本
- ②万国対峙のシンボルとしてのロシア 対馬占拠事件の記憶
- ③神経症化する国民 象徴としてのシベリア鉄道

4, ロシアにとっての朝鮮半島は？

- ①朝鮮への興味薄のロシアと、強く期待した朝鮮国王
- ②朝鮮海峡の根拠地獲得に興味をもつロシア海軍
- ③ロシアの動きを警戒するイギリス＝巨文島事件

5, 日清戦争・三国干渉のなかでの日本と朝鮮

- ①朝鮮の独立をまもり改革を援助 ⇒ 日本の「保護国化」を閣議決定
- ②改革の強要＝国王の権限の制限を求める ⇒ 国王夫妻の反発
- ③三国干渉＝ロシアに弱い日本の姿を見せる⇒国王ら公然と日本に反発、改革停止を図る
- ④閔妃殺害事件⇒高宗のロシアへの接近⇒露館播遷（国王、ロシア公使館への逃げ込む）
- ⑤他方で、日本の朝鮮に対する絶大な影響力の存在
⇒ロシアは、日本と対立してまで朝鮮進出をめざすのか＝日露による朝鮮分割案を拒否

6, ロシアの基本戦略＝旅順軍港への補給路確保

- ①1898 関東州（旅順軍港）租借⇒補給路の確保に注力＝南満州鉄道の敷設
- ②1900義和団による鉄道の破壊
⇒ロシアによる満州侵入・駐留（占領）へ ⇔ 日・英・米と対立
- ③南満州鉄道の通行保障⇒朝鮮北部の非武装化をもとめる。⇔朝鮮支配をめざす日本と対立
- ④海上ルートの確保⇒朝鮮海峡の海軍根拠地計画（馬山事件）⇔日本のシーレーンと衝突

7, 「大国」ロシアの宿命

- ①専制国家としての問題点…各分野が勝手に行動、皇帝個人の判断（感情）に左右される
- ②大国としてのおごり
 - 1) 名目・きっかけなしの満州撤兵は困難＝「みかえり」の要求⇔日・英の妨害
 - 2) 妥協案の提示（韓国占領の容認）を躊躇＝韓国への信義とのかかわり⇔焦りを強める
 - 3) 日本の攻撃とくに全面戦争の可能性を否定、交渉の引き延ばし
- ③危険な「処方箋」＝「新路線」の採用＝強力な軍事力で日本の好戦論を抑えようとする。
⇔日本の緊張感、頂点に＝開戦論の高まり

II, 日露戦争の開始～日本とロシア

1, 1904年(明治37)年2月7～8日 日本海軍による奇襲攻撃

2, 宣戦布告…ロシア：2月9日、日本：2月10日（※日本は2月6日に国交断絶の最後通牒を手渡す）

3, 実際の戦闘行為の開始＝韓国に対する主権・中立を侵害

- ①2/6釜山・鎮海湾を占領 2/7仁川へ奇襲・陸軍上陸⇒ソウルへの進軍
- ②日韓議定書（2/23）、第一次日韓協約（8/22）⇒韓国政府・民衆へ協力を強要⇒属国扱いに

③とくに早期の鉄道開通をめざし土地と民衆の労働力を徴用⇒妨害や抵抗運動の発生

4, 開戦の背景～ロシアの油断、日本の焦り

①日本軍の攻撃の可能性を軽視、韓国占領のみと判断

②シベリア鉄道への日本の危機感をつかみ切れない⇒日本陸軍＝全通後の勝利は不可能と判断

③不意を突かれたロシア⇒国民の支持は弱く、準備も不十分

5, 参謀本部の作戦計画

①シベリア鉄道が全面開通せずロシアが兵力不足のうちに

②可能な限りの大軍を満州南部に送り込み

③できるだけ早く決戦にもちこみ、圧倒的な勝利を得て、

④外交ルートにより早期講和に持ち込む

⑤前提としての、兵員・物資の輸送ルート、海上権の確保

6, 緒戦における経過

・第一軍 朝鮮半島に上陸⇒半島を縦断、5/1鴨緑江渡河
⇒南満州平原へ

・第二軍 5/5～遼東半島南岸に上陸⇒旅順へ補給路を切断
⇒南満州平原に進出

・第三軍 5/27 第二軍の二個師団などで編成⇒旅順攻略戦

・第四軍 6/30編成 南満州平原に進出

7, 作戦計画との齟齬

①二方面作戦＝南満州平原での兵力の優位はなくなる

②膨大な弾薬の消費＝弾薬不足による作戦遅延、

⇒ドイツ流「火力主義」と機動戦は困難に

③旅順要塞の防衛力＝膨大な犠牲と武器弾薬などの消耗

⇒日本軍主力の遅れ・＝早期決戦、圧倒的勝利、早期講和のシナリオ崩壊

④9月シベリア鉄道の全通⇒輸送はしだいに改善しロシア軍の量的優位が確立、数的劣勢の戦いに



Ⅲ、苛酷な戦場～旅順・南満州平原（遼陽・奉天など）・対馬沖

1, 旅順作戦…海軍より陸上からの攻撃を依頼

2, ロシア・ウラジオ艦隊（4隻の巡洋艦艦隊）⇒日本海6回太平洋1回出撃⇒海上輸送を大混乱に

3, ウラジオ艦隊の攪乱作戦が示すもの

①兵員や武器弾薬等の物資を戦地に送ることができない。さらには水没死なども。

②海上封鎖の危機＝貿易が途絶、兵器や原材料が届かなくなる⇒産業・生活への影響。

③列島への直接攻撃の危機＝艦砲射撃、上陸作戦など。

4, 日本海軍に課せられた任務と旅順攻略戦＝海上権の死守、朝鮮海峡・黄海・日本海の制海権確保

①旅順艦隊と、本国から来るバルチック艦隊の共同作戦を阻止する

②バルチック艦隊がくるまでに旅順艦隊を無力化する（湾内封鎖ないし壊滅）

③やってきたバルチック艦隊を撃滅する。

5, 旅順要塞攻略戦（04年8月～05年1月）第三軍（乃木希典司令官）

①陸上からの攻撃で旅順艦隊を追い出す。または壊滅させる

②旅順攻防戦…第一回(8月)第二回(10月)⇒正面突破を失敗。膨大な犠牲者。国民の非難
第三回(11～12月)二〇三高地をめぐる死闘⇒旅順艦隊壊滅、1月ロシア軍降伏

6, 南満州平原における激闘（04年8月遼陽会戦～05年3月奉天会戦）

①8月末遼陽会戦から、1905年3月初の奉天会戦まで、日露双方の大軍が対峙、激戦を繰り返す。

遼陽会戦⇒沙河の戦い⇒黒溝台の戦い⇒奉天会戦 史上最大級の戦闘を継続する

②奉天会戦（1905年3月1日～10日）日本：21万人、ロシア：30万人が参加、

1) 史上最大の戦闘、ロシア軍の撤退により奉天と周辺を占領（「惨勝」）

2) 日本軍約7万・ロシア軍約9万の死傷・不明者（ともに損耗率28%）⇒追撃・撃滅は不可能

3) 前線からの講和を求める声のたかまり

7, 司馬遼太郎の指摘＝「日本が勝ったのではなく、ロシアが負けた」「自ら膝をついた」

8, ロシアの敗因

①有能な将校・兵士とそれ以外のばらつき、部隊間・司令官同士の連携の弱さ。

実力よりも家柄や皇帝との関係の重視＝国内の矛盾を反映

②ロシア軍の「戦略的」撤退？

③士気の低下、国内の批判の高まり、国債販売の不調

9, 日本軍の優位を支えたもの

- ①ナショナリズム＝兵士の意識の高さ、軍隊における「実力主義」、最新軍事技術の導入
1) 将兵の質と練度の高さ 2) 電信・電話を利用した共同作戦と各部隊の連携が可能に
- ②弾薬不足と将兵の質と練度の低下（とくに中・小隊長クラス戦死）、兵力不足

10, 日本海海戦～バルチック艦隊の悲しき大航海

- ①ロシア、ヨーロッパ・ロシア側の艦船からなる第二太平洋艦隊（バルチック艦隊）を編成
- ②04年10月出航、半年をかけ、喜望峯経由の33,340キロの航海。馴れない熱帯を経由する
1) イギリスによる執拗な妨害、同盟国フランスの非友好的対応。
2) 補給・修繕・休養の困難。疫病の発生、将校と兵士の対立。⇒最悪の状態で極東に
- ③5/27～28 日本海海戦＝日本海軍の完勝、バルチック艦隊壊滅

IV、世界初の本格的な近代戦争・総力戦

1, 世界史初の近代戦争・ハイテク戦争

- ①1870～71年の普仏戦争以来、30数年ぶりの近代国家間の本格的な戦争
- ②重化学工業を中心とする第二次産業革命が急速に進展。兵器や軍事技術の急速な革新
- ③凄惨な「ハイテク戦争」＝機銃による大量殺戮、桁違いの砲銃弾量、28センチ榴弾砲など
- ④情報機器の使用…戦場での電信電話使用＝機動的な兵力運用

2, 「総力戦」＝戦争の「現代化」 兵員と兵器の供給能力が死命を制する

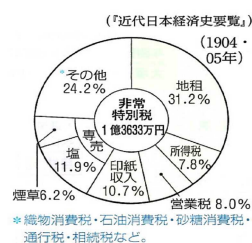
- ①行政制度の整備…徴兵と徴税を支える地方制度の整備、鉄道などの整備
- ②フル操業の軍需産業…過労死と労災事故する軍工廠、不足分は輸入にたよる
- ③マスコミ対策

3, 膨大な戦費調達＝総額約18億円

- ①戦争準備時における重税
- ②増税＝約五億円調達（税収の負担約2倍に）
1) 間接税中心＝逆進性（貧困層に重い性格）
2) 地方税の歳入減⇒生活関連費の削減
- ③内国債＝約6億円…最終的には各戸に割り振る。
- ④外国債＝7億円…英・米の銀行家が応じる

戦費の調達 (単位：万円)

臨時軍事費の財源(予算)内訳	
内債・外債	13億1354
一時借入金	1億7888
一般会計繰替	1億8900
(非常特別税を含む)	
特別会計資金繰入	6300
軍資献納金	150
雑収入	50
合計	17億4642



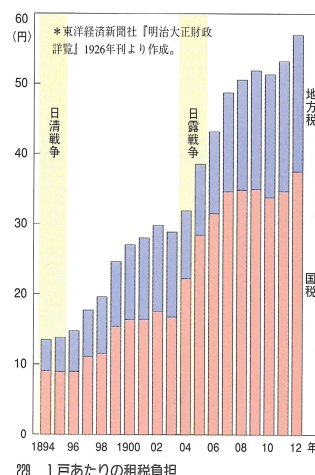
4, 外国債の発行をめぐって

- ①それまでの財政規律を放棄＝「借金財政」へ
- ②外債募集＝高橋是清らの奔走
- ③ユダヤ系金融ネットワークの協力
ロシアへの民族的反発と変革期待、鉄道資本などの利害も

5, 日露戦争と「死の商人」

6, 日本のイメージ戦略～外国債販売と密接に関連

- ①「専制国家と文明国の戦争」であると強調、日本的価値観を強調
- ②欧米人記者の招待…従軍を許可＝開かれた戦争に、日本有利を発信
- ③ロシア不利の記事⇒同盟国フランスが外債募集を拒否⇒戦争継続困難に
- ④「文明国」であるという制約…捕虜への対応などに配慮せざるを得ない



V、戦争と国民

1, 熱狂する「国民」…「国民」としての一体感＝「日本人」意識の高まり

- ①国民の戦争協力＝重税や国債、寄付・徴用、兵士の歓送迎、慰問、戦病死者への弔魂儀礼など
- ②戦勝祝賀行事などイベント開催＝「日の丸」「万歳」提灯行列
- ③戦争を通して「日本人」「国民」を実感
＝裏返しとしての、中国人や韓国人への差別・偏見も

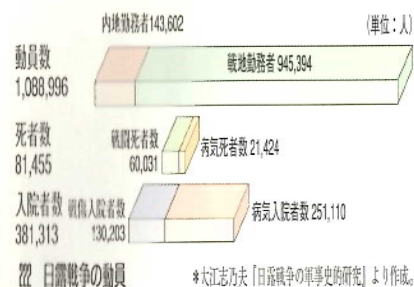
2, 過熱するメディア＝販売部数の急増

- ①戦争によって発展した新聞＝大量の特派員、号外、写真版
- ②開戦論をあおり、開戦後は戦争報道に力を入れる。

3, 戦争が引き起こす悲劇

- ①戦死者・戦病死者・負傷者の大量発生
- ②戦場・銃後の過酷な実態
- ③出征が引き起こした悲劇…徴兵逃れ、兵士の家族の生活苦

4, 与謝野晶子「君死にたまふこと勿れ」



Ⅵ、ポーツマス条約と日比谷焼き打ち事件

1, ロシア第一革命の発生

- ①05年1月、「血の日曜日」事件⇒ロシア第一革命の発生、各地でストライキ発生
- ②日本海海戦の敗北⇒戦争の継続困難に

2, 講和への動き

3, 列強の動き…日本の大勝、軍事大国化を警戒＝東アジアの安定を要望

4, ポーツマス講和会議 T.ローズヴェルト米大統領の仲介 日本：小村寿太郎、ロシア：ヴィッテ

- ①日本側の条件＝薄氷を踏む勝利であり戦う余力のないことを熟知＝国民世論との認識の差
日本政府の「絶対条件」と「希望条件」
- ②ポーツマス条約の内容⇒賠償金は獲得できなかった

- 1)韓国の指導監督権承認 2)旅順・大連の租借権引き渡し 3)長春以南の南満州鉄道敷設権
- 4)北緯50度以南の樺太 5)沿海州沿岸の漁業権

5, ロシアの正当な主張と日本の対応⇒韓国と清国の立場尊重を要望⇒日本の拒否

6, 条約受け入れ反対の動き

- ①「大阪朝日新聞」など各紙、反対キャンペーン＝「白骨の涙」
- ②講和反対国民大会の呼びかけ
- ③国民の声

戦費を出させるときは議会だとか何とか騒いで金を出させて、戦に勝ったときには乃公のお手柄といわんばかりに自慢してさ。
それはまだしも肝要の講和条件となると独断でやって、おまけにろくでもない結果を国民に負担させる。戦費と兵卒は誰が出したんだ。



7, 日比谷焼き打ち事件

- ①9月5日、「講和反対国民大会」を開催
⇒群衆の暴徒化、警察署や派出所・交番などを襲撃
- ②政局には波及しない
⇒桂首相による西園寺政友会総裁への首相交代の密約の存在

8, 日比谷焼打事件が切り開く「大正」

- ①事件の中心…職工、職人、人足など都市無産身分と、メディア
- ②「外への帝国主義」…「犠牲に釣り合うのか」＝「白骨の涙」の論理。
- ③「内には民本主義」…国民の意見を聞く義務がある⇒民衆運動の活発化、普通選挙要求など
- ④「長い大正」の始まり＝「内には民本主義、外には帝国主義」

9, 「戦争での死」をどう位置づけるべきなのか＝軍・政府の対応

- ①戦死者は国家のための名誉ある死として、靖国神社の祭神に位置づける、天皇も参拝。
- ②都道府県には招魂社、村々には忠魂碑を建立⇒郷土の英雄として慰霊・顕彰
- ③兵士に国家のための死を納得させる装置として位置づけられる。

Ⅶ、おわりに～「坂の上の風景」

1, 最大の結果としての「韓国併合」

- ①戦時下、事実上の軍事占領＝日韓議定書・第一次日韓協約
- ②1905 第二次日韓協約＝外交権を奪い「保護国」に、ポーツマス条約を承諾させる
- ③1907 ハーグ密使事件⇒高宗の退位、韓国軍の解散、第三次日韓協約＝韓国の内政権を奪う
- ④抗日義兵闘争の活発化⇒安重根、伊藤博文を暗殺
- ⑤1910韓国併合＝植民地化、武断政治⇒以後、三一独立運動など民族運動つづく

2, 中国民族運動との対立

3, アメリカとの対立

4, 目標を見失う日本～唐突に終わる「坂の上の雲」

5, 「長い大正」～活発化・多様化する民衆運動

<参考文献>

- 和田春樹『日露戦争 起源と開戦』、原田敬一『日清・日露戦争』『戦争の終わらせ方』
- 山田朗『世界史の中の日露戦争』『日露戦争の真実』、海野福寿『日清・日露戦争』
- 井口和起『日清戦争の時代』、朝日新聞社『朝日百科・日本の歴史』 伊藤之雄『山県有朋』
- 司馬遼太郎『坂の上の雲』 山本武利『近代日本の新聞読者層』